二〇世紀初頭の同志社と米田庄太郎

田中和男

目次

一　はじめに
二　奈良からニューヨークへ
三　アメリカ体験
四　同志社時代
五　むすびにかえて――同志社辞任

キーワード
米田庄太郎、同志社、アメリカ、社会学、差別

一　はじめに

米田庄太郎（一八七三―一九四五年）が主に活動した時代は大正デモクラシーの時期であり、その言論・思想に関してはいくつかの研究がすでになされている。欧米の社会思想を紹介するだけではなく、大衆社会的な状況や、社会主義・労働運動についても多くの論稿を著したこともよく知られている。[1]「現代日本社会学の父」と称されている社会学分野の米田の貢献についても、京都帝国大学時代の弟子の一人である高田保馬の論文以外に、多くの研究が積み重ねられている。[2]その中で、米田が被差別部落出身であることが指摘され、その「烙印」が彼の研究活動にも影響を与えたのではないかということが問題とされた。桑原武夫によって公に指摘された後、社会学史研究の中でも中久郎らによって探究された。[3]出身自治体（奈良県）での記念展覧会も開催された。[4]米田自身は、出自を言明した（カムアウト）わけではないし、出自による被差別を自覚して語っているわけではない。出自を隠蔽したまま米国留学した米田の姿を『破戒』の丑松と類比する言説もある。しかし、一九二〇年前後には、米田の京都帝国大学教授就任の遅れに関連して、出自が噂されていたし、いわれなき差別に打ち勝つために、学問の場での実力を蓄える必要を米田は感じ取っている。「帰朝後、殊に京都帝国大学文学部に関係して以来、私の地位を保つ唯一の途は、只益々私自身の実力を養ふより外になかつた」[5]という米田の決意の中に、「部落民の主体形成」を読み取ることは不可能でないかもしれない。米田の経験や思想を考察するためには、弱者に対する差別・排除が強かった日本近代の具体的な状況を考えることが必要であろう。出身階層、出身地域、学歴の有無、健常・障害者、性別など様々な差異による差別／排除が考慮に入れられなければならない。

本稿は、米田の思想や生き方を近代日本社会の中で考察する前提として、二〇世紀初頭の同志社と米田庄太郎との

関連を確認するささやかな試論である。一九一〇年代以降、社会学研究を本格化する米田の経歴から見れば、二〇世紀初頭の一〇数年にわたる同志社時代（一九〇二―一四年）は、ある意味では余分な寄り道に過ぎないのかもしれない。実際、同志社の歴史の中では、米田については正面から扱われていないし、社会学の歴史にとっても、不毛な前史ということか、ほとんど顧みられることはない。[6] しかし、同志社時代の米田は、年齢からいっても三〇代から四〇代であり、彼の学問・思想の基盤が作られる重要な時期を過ごしたということも出来よう。自己の存立理由である実力の研鑽は、同志社においても追求されたに違いない。本稿では、多くはない資料をつなぎ合わせつつ、米田が普通学校・専門学校・大学の教授として同志社教育に関与する経緯について確認をし、その思想形成の一端を考えてみることにしたい。筆者の能力と紙数の関係で、数多く発表された論説やエッセーについては、中心的には同志社を離れる一九一〇年代以降が多い、ということもあり、十分には検討されていないこと、また社会学についての細かい知見についても不十分な面のあることをあらかじめお断りして置かなければならない。

さて、米田は二〇世紀の初頭、イギリスに代わって世界のリーダー・帝国として勃興しつつあるアメリカ合衆国の大学出身（コロンビア大学）の「洋行者」として同志社に迎え入れられたことから、話しは始められる。

二　奈良からニューヨークへ

一九〇二年の一月七日、同志社普通学校の始業式で、米田庄太郎は新任教授として幹事である大塚素によって学生たちの前に紹介された。三月二八日には米田たちの人事も理事会で異議もなく承認された。この理事会では、前日、新しい同志社社長として片岡健吉が就任することが認められた。新島襄の希望でもあった、同志社を高等・専門教育

の府とする一歩が進められて行くことになった。内務省嘱託を務めた留岡幸助も理事の一人として参加している。[7] 留岡は翌月には奈良の被差別部落の視察に向かうことになる。その近辺にあると同志社病院の佐伯理一郎に教えられた北山十八間戸を訪問した。留岡にとってはこの視察が、部落問題に積極的に発言をして行く契機となった。[8] 新任教授として迎えられた米田について、『同志社校友会々報』は早速次のような紹介記事を掲載している。少し長いが全文を以下に掲げる。

「校内記事…

◎始業式　一月七日下村校長始業式を挙げらる。此日大塚幹事新任教授米田庄太郎氏を紹介せらる。

◎新任教授　同志社は更に一個の有力なる新任教授を得たり、新任教授を誰となす、米田庄太郎氏是れなり、氏は大和の人、学殖富膽、博聞強記、天成の学者なり、今其学業履歴の一斑を記せんに始め大和郡山中学校に学び旧奈良英和学校に転し同校を卒業して後専ら独学す、此間ヅーマン氏の編纂せる比較宗教学四巻を翻訳附註して出版す且東京三一神学校に於て同氏の比較宗教学講義の助手たり又奈良に関する古文書の蒐集を企て北浦氏の大奈部小奈部山陵考を探り得て序文を附して出版せり、当時主として研究せしは西洋哲学東洋哲学比較宗教学人類学言語学考古学土俗学梵語等なり後米国に渡りニユヨ（ー）クのゼネラル、セオロジカル、セミナリに入り三年の業を卒ゆ主としてヘブリユー語、旧約書文学、グリーキ語基督教始源史を研究しコロンビヤ大学院に入りてギツデングス及バルモス（ママ）の両教授に従て社会学公法学を研究すセミナリー卒業後は同大学院にて専らクラーク　セリグマン　メーヨスミス等の教授に従て経済統計等の諸学を研究し傍らニユーヨーク博物館人類学部にてボーアス教授に従ひて人骨測定に従事す後ち高峰博士の助手となり同氏の化学実験所にてマイクローブの細胞分泌物殊にポリザイムの研究に

従事せり夫れより欧洲に渡り仏国巴里に止り仏国大学院（ママ）（コルレーヅ、ヅ、フランス）及び社会学自由大学（ママ）（コルレーヅ、リーブル、デ、シオンス、ソシヤル）にてター（ルド）レヴァサー　イヅレー　リボー　ジヤ子ーフンクブレンタノ等の教授に就て社会学統計学、比較法律学、心理学等も研究し又社会博物館万国博覧会社会経済部にて社会経済を研究す

同氏が其学べる学問の範囲如此広しと雖敢て該博を衒はず一意宇宙間最複雑なる社会てふ現象を満足に研究せんとして又同一の主意よりして英独仏伊西等の近世欧洲語と併せて梵語ヘブリユー語グリーキ語ラテン語等の古語をも学べり而今や更に露西亜語を学ひつゝありと云ふ氏の望は社会学研究の材料を広く其根本に於て求めんと欲するものゝ如し、氏在米の日、同志社出身の人々と親善にして同志社の主義精神を愛する事深く帰朝の上身を我社の教育に委せられしは最も喜ふ可きことゝなす」[9]。

コンパクトにまとめられた紹介文に米田の多才振り「学殖富贍、博聞強記」が示されている。一八七三年奈良の貧村に生まれた米田は、県立の郡山中学校を中退し、奈良町にアメリカ系の聖公会の手で開かれていた奈良英和学校に転学し、そこで洗礼を受けると共に（一八九一年）、監理司祭として赴任していたヅーマン（Isaac Dooman―以下ドゥーマンと表記する）によって才能を見いだされ、ドゥーマンの著作『比較宗教学』を翻訳したり、通訳・秘書の役割を果たした。一八九五年一時帰国するドゥーマンに連れられてニューヨークに渡った米田は、ドゥーマンの母校でもあった聖公会系の神学校に学ぶ傍ら、コロンビア大学でも勉学に努めた。渡米するに至る経緯の中でのドゥーマンとの出会いの意味は大きい。コロンビア大学で学ぶ中で、「同志社出身の人々との親善」が始まり、同志社に招かれることになったのである[10]。

米田の一生の方向を決定した人物としてドゥーマンの役割は大きい。ドゥーマンへの感謝は米田も感じていたに違いない。一生涯を聖公会系の教会に属すクリスチャンとして送ったこともその現れといえなくはない。一九一八年、奈良基督教会で開催されたドゥーマン来日三〇周年記念会には発起人として参加し、二三年、帰国するドゥーマンを迎えての送迎会にも参加し送辞を述べた。洗礼を受けた奈良基督教会との繋がりも途絶しなかった。三一年にドゥーマンは死去するが[11]、その追憶録に寄稿した米田は次のように、ドゥーマンと自己とのかかわりを振り返っている。

「ドーマン先生は波斯に生れたアルメニア人にして、米国に帰化し、同国に於て学業を卒へたる後、米国聖公会伝道会社から我国の宣教師として派遣され、異郷我国の為めに活動的生涯の全部を捧げ、我国の文化発達に貢献する処少なからざる奇しき運命の人である。…ドーマン先生が米国伝道会社から日本の宣教師として派遣され、奈良に着せられるや間もなく奈良英和学校で教鞭を執られ、私共は先生の教授を受けたのである…私共は先生から、ゼヴオンスの論理学、ポーターの心理学、カルダーウッドの倫理学等を学んだのである。…私は実にドーマン先生から多大の恩誼を受けたので、常に感謝して居るのである。併し私は金銭上、先生の御援助は全く受けなかつたのである。先生に伴はれて渡米する際の費用も、父が残り少なき田地を抵当に入れ、又其の他の方法で作つてくれたので、夫れが為め帰朝後私は実に心苦しき事件に遭遇した程である。

私は渡米後先生の御周旋によりて、ゼネラル、セオロヂカル、セミナリーに入学し、コロムビア大学に兼学して居たが、セミナリー卒業後は家庭教師や通訳や其他の方法で学資を作りつゝ、コロムビア大学で研究を続け、更に欧洲に遊学したのであるが、帰朝後、殊に京都帝国大学文学部に関係して以来、私の地位を保つ唯一の途は、只益々私自身の実力を養ふより外になかつたが為め、日夜研学に力を集中し、非常に多忙を極めて居たが故に、緩つくり

先生を訪ねる暇がなかつたことを、今に非常に遺憾として居る」[12]。

ドゥーマンの宣教の熱意と米田の「境遇」に対する「同情」や「恩誼」を受けたことへの「感謝」が表明される一方で、渡米の費用や勉学のための学資についてはドゥーマンの「御援助」をきっぱりと打ち消し、父親の負担と米田自身の家庭教師、通訳、大学近くにある高峰譲吉の実験場やアメリカ自然史博物館のボアズの下での「人骨測定」のアルバイトなど自己努力を強調している[13]。ユダヤ系ドイツ人のボアズは、アメリカに移民しユダヤ人として最初にコロンビア大学教授に就任した一人であり、人類学の分野では、アメリカ原住民、「エスキモー」などのマイノリティの現地調査を行うことでアメリカ人類学の学問としての自立を図った。またボアズは、勃興しつつある黒人の解放運動についても好意的な発言を行ったことでも著名である。米田が、欧米留学から学び取った一つは、後述する社会学という専門分野の知識だけではなく、様々な面で「実力を養ふ」自助的な生き方であった。コロンビア大学・大学院で学ぶ中で、ドゥーマンの思惑を離れて、神学徒・宣教師の道を替え、社会学者という世俗的専門職としての道を選んだのも、その現れであった。神学校の学監でありドゥーマンの知己であったホフマンは米田の様子を次のように報告している。

「（神学校を）五月已に卒業せられBDの学位を受けられ候、氏は聖職としてよりも寧ろ平信徒として日本に帰り伝道に力を添ふる方利益ありて人望稍収まるに及んで按手せらるゝも尚遅きにはあらざるべしと考へられて随て聖職志願者にはならるまじと存候、学校生涯は不屈不撓常に能く勉強せられ教員等は甚温和なる性質と出精とに感心仕候」[14]。

聖職から平信徒への選択は青年期にある米田の精神的自立であり、アイデンティティの確立でもあった。それはドゥーマンの精神的支配からの独立でもあったと思われる。ドゥーマンは後に日本での宣教師としての経験を記述した『神々の国における一伝道師の生活』*A Missionary's Life in the Land of Gods*（The Gorham Press, 1914, pp201-203）において匿名ではあるが米田について次のように記している。宣教師として奈良に赴任したドゥーマンは、教会に設置された奈良英和学校に学ぶ学生たちの中で能力のある三人を見いだす。

「三人の貧しい少年のうちで、一人（岡実）は現在農商務省の要職につき、急速に入閣の動きもある。彼はまだ大変若く、彼の前途は極めて輝かしい。二人目（吉岡礼一）は日本最大級の生命保険会社の管理職でかなりの実力を蓄えているということだ。彼は現在属している教会の柱となって教会の自立にむけておおいに貢献してくれている。彼もまた大変若く前途洋々たるものだ。

三人目(米田庄太郎)だが、彼の場合はあまりにも並外れていて、私は詳細にわたって彼の一代記を書きたいと思うくらいである。一、二ヵ月教えた後、私の注意は彼に釘付けになった。彼は非常に勉強熱心で頭も良く容貌も立派に思えたが、他の生徒が彼とつきあおうとしないことに私は気がついた。実際彼は百二十人の生徒のなかで一人排斥（ostracised）されていた。私は彼が気分がすぐれないのか、あるいは伝染病でありはしないかと心配した。それで私は英語の教師のところへいき彼が孤立している理由をたずねた。彼はエタであるということだった。「エタとはどういう意味だ？」彼の返答は「エタとは新平民のことです」であった。……

「エタ」というのは「パーリア」「最下層民 the lowest caste」のことだと（辞書には）書いてあった。これは私にとって啓示であった。仏教の存在理由はバラモンをはじめとするインドのカースト制を廃止するためのものであっ

たはずなのに、現在、仏教の色合いの濃いこの国でカースト制が持ちこたえているどころか、助長されているのである。私の人生でこの可愛い排斥されたパーリアの少年に接したときほど魂の奥底がえぐられる思いをしたことはなかった。私は思った。「もしもキリスト教の力でこの少年を世俗的霊的両面においてこの環境から救い出し、高め育て、クリスチャンの手本にすることができなければキリスト教は日本にとって何も役にも立たない」と。私は彼を家に招待して彼を子供たちに紹介した。彼は生徒の中で最も博学だった。彼は古代宗教に関する私の講義を日本語に翻訳したが、彼の翻訳は日本の文芸界でも高い評価を得ている。一八九五年の秋に短い休暇で帰国する際、私は彼をアメリカに連れていった。ニューヨークの親切なキリスト教徒の友人の世話になりながら彼は高水準のアメリカの教育を受けた。彼は現在帰国して大学で講義を持ち、さらにそのほかにも責任ある役職にある。最低の素材から最高の型を作り上げる彫刻作品のように、わたしはこの蔑まれたエタの生きた彫像を、かのミケランジェロの生命のないダビデ像よりもはるかに優れた作品であると思っている」[15]。

被差別民として生まれた米田が仲間から孤立する姿と、その能力を発見して「最低の素材から最高の型」を創造しようとするドゥーマンの宣教の使命観が対比的に描かれている。しかし、ドゥーマンの描く米田が本当の米田の姿であるのかは疑問なしとしない。米田のドゥーマン追憶の中では次のように語る。

「始めは私の級は岡実君と私の二人だけであったが、併し間もなく吉岡礼一君、中島恒三君、牧浦房蔵君等が入学され、賑かな級となつた。……さうして併し其の後二ケ年程の間に、岡君が先づ東都に遊学する為めに去られ、次に中島君は家督相続の為めに退学され、間もなく牧浦君も東都に遊学され、只吉岡君と私とが後に残つたが、其の

中には更に吉岡君も東京の聖三一神学校に入学されたので、只私独りが残ることになつた。私も東京に遊学したかつたが、併し学資がない為め望みを遂げることが出来ず、此の時ほど私は寂しく感じたことはない。殊に吉岡君が去られた後は私の級は全く壊滅して仕舞ふたのであるから、学校で授業を受けることも出来なくなつた。此の時ドーマン先生は私の境遇に大に同情して、私を先生の秘書及び通訳に採用し、且つ先生の蔵書を自由に使用する特権を与へて下さつた」[16]。

米田の回想では、同級生が東京で高等教育を受けているのに、学資がない（貧困の）ために「望みを遂げ」られず「寂しく感じ」ている姿が語られる。米田は自身の出自を語っていないから、米田にもその証言には片寄りがあるが、ドゥーマンの方にも、米田が被差別階級の出身だというスティグマに孤立しているとする思い込み（偏見）が潜在している。あるいは、「心の奥底がえぐられる思い」をさせた「最下層民の少年」とはドゥーマンの姿かもしれない。米田と同様、ドゥーマン自身も自己の伝記を詳しく語っているわけではない。米田が述べているように中東イランの少数民族アルメニア人としてクリスチャンの家に生まれたドゥーマンは若くしてアメリカ合衆国に移民し（一八八二年・二六歳）、米田が学ぶことになる神学校で学び、一八八七年「日本伝道の命」を受けて日本に派遣される[17]。一九世紀後半、アメリカでは南北戦争後の「金ぴかの時代」であり、資本主義の発達を支える労働力としてアングロサクソン系以外の東欧、ユダヤ、アジア系の移民の増加が見られ、人種のるつぼの神話が形成されだした[18]。ドゥーマンが著作を著す際に影響を受けたと思われるラフカディオ・ハーンも同じ時期に、アイルランドからアメリカに渡り、さらに、日本に、ジャーナリストとして、あるいは教師として欧米の先進文明を伝え、西洋文明を背景にして日本の特殊性を欧米に伝えた[19]。ギリシャ・アイルランド・アメリカ南部・西インド諸島という欧米の周縁に生きたハーンも、後進国・

日本の中では先進文明を代表したように、アルメニアというインド・ヨーロッパの周縁に成長したドゥーマンは、アメリカ聖公会伝道会社から派遣されたキリスト教の宣教師として文明を体現することが出来た。実際、前述の米田の証言にもあったように、「異郷我国の為めに活動的生命の全部を捧げ、我国の文化発達に貢献」した。来日したばかりの頃、奈良町に自由民権運動の流れの中で設立された興和会の機関誌『興和之友』に何回か寄稿している。[20] ハーンにとっては出雲が日本の原点と考えられとすれば、奈良という仏教の中心地で宣教を行うドゥーマンにとっては、仏教が肯定するカースト制度の野蛮は批判されるべき対象であり、野蛮の犠牲者である哀れな少年は救済されるべき対象であった。ドゥーマンの思惑はともあれ、米田にとっては、ドゥーマンによって人生の新たな機会が与えられたのは確かであった。米田も「不屈不撓常に能く勉強」することで、ドゥーマンの期待にも答えようとしていた。神学をさらに深めることによって聖職に就けば、ドゥーマンがそうであったようにエスタブリッシュの中で安定した生活が保障されたかもしれない。カースト制度からの解放を得られたかもしれない。しかし、米田は「平信徒として日本に帰」ることを決断する。神学以外に彼を支える実力が発見されたということであろう。それは社会学の知識をおいて外にはない。

三　アメリカ体験

新しいチャンスを与えたのが、大学での研究の蓄積と同時平行的な同志社グループとの付き合いであったと思われる。アメリカ時代に米田がどのような生活を送ったのか、彼がどのようなアメリカを見たのか、米田自らが語ることはほとんどない。資本主義の発達は労働運動の活発化、スラム問題に現れるような社会問題が深刻化した。デンマー

ク出身のジェイコブ・リースが警察周りの探訪員としてニューヨークの貧困街を調査し、『残りの半分はいかに暮らすか』という書物を著した。[21] 社会の改良を求める社会福音派のキリスト教やキリスト教社会主義の影響も強まっていく。[22] こうした動きに、米田がどのような影響を受けたのか。社会学の師としてギッディングズに学んだこと、様々な書物を読み、その中のいくつかを翻訳（英訳）しようと思ったことが語られるくらいである。[23] コロンビア大学・大学院での研究についても詳しいことは分からない。しかし、同志社への就任の際の紹介文に書かれている多才な教授たちの影響は無視できないと思われる。

よく知られているように、一九世紀後半から二〇世紀初頭のアメリカは、社会諸科学がそれぞれの方法論を自立させる時期に当たる。[24] アメリカ経済学会、政治学会、社会学会がそれぞれ組織化される。ギッディングズは社会学の面でその努力を行った中心の一人であった。政治学でのバージェス、経済学でのクラーク、セリグマン、統計学のメイヨースミスなどそうそうたる人物がコロンビア大学にはおり、それらの人々に米田は学んでいる。コロンビア大学自身が、この時期カレッジからユニバーシティに組織替えされ、専門大学院が作られていった。その中心人物がバージェスであったといわれている。バージェス、クラーク、メイヨースミスはアーモスト大学出身者あるいは関係者でもあった。特にバージェスは新島襄が大きな影響を受けたシーリーにも学び、深い影響を蒙っている。バージェスによればシーリーは「最も示唆に富んだ精神」を持っており「学部の中でも最もシャープで偉大な知性」であり「神学者・自然科学者・歴史家・法学者」として様々な問題を批判したが、個人主義的な観点だけではなくヘーゲル的な傾向がみられたという。[25] 新島とバージェスが同時期にシーリーに学んだわけでないので、バージェスが新島を知っていたかは分からない。[26] すでに、米田が奈良英和学校時代に新島は死去しており、追悼会が奈良基督教会でも行われている。奈良のキリスト教布教については、聖公会と組合系同志社の協力関係があり、新島公義が派遣されていた。新島追悼会

が開催されのもその関係であった。[27] 米田が追悼会に参加したかどうかは分からないが、アメリカ（アーモスト）と新島の係わりは奈良での学生時代以来、米田の認識の中にあったであろう。

ニューヨークで勉学する中で、米田は同志社出身の人々に出会ったと推測できる。これについても米田は何も語っていない。しかし、例えば、同じ時期、同志社神学校を卒業した日野真澄が一八九七年渡米し、ニューヨークのユニオン神学校に学ぶと共にコロンビア大学でも研究を行なっている。彼は米田より早く帰国し、一九〇一年同志社神学校教授に就任している。[28] 米田が帰国した際、同志社の理事となっていた留岡幸助も、一八九三年に空知集治監を辞任し監獄制度を研究するためアメリカに渡り、九六年までニューイングランド、ニューヨークを往復していた。しかし、米田との接触の機会はなかったかもしれない。彼の滞米日誌には米田の名はない。[29] 米田との接触の可能性の強い人物としては、留岡と同様集治監教誨師を勤めていた大塚素がいる。彼は留岡を追うようにして九五年、教誨師を辞職、渡米して、やはり監獄事情の研究を行おうとしていた。結局、固定した研究機関に学んだわけではないが、一九〇〇年、イギリス・フランス・ベルギーなどを経由して帰国し、同志社幹事に就職した。〇四年、同志社を辞職し、キリスト教青年同盟の関連で朝鮮・満州の派遣された大塚は、満鉄などで社会事業の一端を担うことになるが、二〇年、五〇歳を過ぎたばかりで死去する。[30] その追悼文で同志社普通学校教頭などをつとめた中瀬古六郎は述べている。「其の後我れ我れが共に米国留学中彼の地にて一、二回相会して、山口精一君や三宅驥一君、牧野虎次君等と共に、熱烈に同志社問題を談論し、遂に相携へて同志社再興の業に当らんことを相黙契したのであつた。私が明治三五年の一月に帰朝した時には、大塚君は已に広津校長に辞任したる後を引受けて同志社全局の衝に当り…此くする間に新帰朝の少壮教授の数漸くに増し加はり、前述諸君の外に故広川友吉君、青木澄十郎君、千葉勇五郎、日野真澄君、米田庄太郎君等の参加するあり」。[31]

また、同志社卒業生で同志社普通学校教員となった加藤延年の大塚の回顧にも「氏が同志社に於ける事業は、氏が在米中の同志を拉し来たりて、洋行者内閣を組織し、辣腕を揮つて萎靡せる同志社学生を激励鞭撻し、片岡社長を奉じて同志社の天下を号令し、執権専横の議をも顧みずして或は職員を進退し、或は学制を変革し」たという。[32] 大塚についての回顧であるので割り引いて考える必要はあるにしても、一九〇〇年前後の同志社改革の中での大塚の欧米留学者を教授陣の中心に据える「洋行者内閣」への熱意を感じさせる。この「洋行者」の一人として米田が招聘されることになった。ところで、在米時期の大塚の日誌には次のように米田の名前が書き記されている。

「(一八九六年一二月一九日) 知人の来訪を待ちて、／こゝろ待ちにまちにし友をまちわびて／よむ文さえとつおいつなり／待ちし米田来りて、例の浴室にて対坐談笑、談更に尽きるに所用ありてとて、一々に去る。

(一二月二三日) 午後快晴、中村と米田を訪ひ共に書肆に行き、ベーコン論文集、ハベロックエリスの犯罪者論を買ふ。……十二時にはホドソン川の船止る…

(九七年一月五日) 夜来会に行く、米田、平岩、中村、奥野、斎藤等と線香に点火して英語の尻取りをなす、小遊戯の端と雖其品格を表はすもの多し、素養の足らざるを戒しむ。

(一月二九日) 夜十時過ぎ米田を訪ふ人類学犯罪学より男女婚礼の事に及び、話頭より話頭に移りて互に一身の経歴を説き、一時に床に入り四時まで語りつゞく、米田は徹宵語りしは生来始めてなりと云ふ。五時床を出でゝ船に帰る」。[33]

数箇所現れる米田が米田庄太郎のことかどうかは分からない。ベーコンやハブロック・エリスの犯罪者論を買った

り、人類学や犯罪学を共に語り合える人物として米田庄太郎を考えても全く間違っているわけではないであろう。前述のように、ニューヨーク時代に米田は、アメリカ自然史博物館の学芸員でありコロンビア大学人類学教授であったユダヤ系ドイツ人のボアズのもとで「人骨測定」などを行なっていた。

こうして、一九〇〇年三月、アメリカでの勉学を終えてフランスに渡った米田は、ギッディングズの紹介でもあったのであろう、コレージュ・ド・フランスでタルドから社会学を学び、翌年、アメリカ経由で帰国。〇二年早々、同志社に就職したのであった。

四　同志社時代

同志社普通学校教授に就任した米田は、早速様々な活動を開始する。授業としては社会学、経済学、統計学などを担当した。社会学では恩師ギッディングズの『社会学要義』*Elements of Sociology*などをテキストとしている[34]。学内での学問的活動としては「諸般の学理を討究し智識の交換」を図るため米田の「熱心なる主唱により」同志社関係者で「同志社講学会」を設置して、通俗講演会などを行った[35]。社会的な活動としては、同志社を訪れた片山潜、西川光二郎と面談したり[36]（一九〇三年）、同志社の学生で社会主義の影響を受けた大石七分が『平民新聞』を販売しに来たとき、図書館委員であった米田は、図書館に寄付するために毎号を求めたという[37]（一九〇四年）。教会関係では、聖公会系の聖三一教会に参加する共に、同志社教会にも協力し、四条教会でも説教などをしている[38]。京都帝大・同志社関係者、京都市長・市議会議員で組織された東洋平和協会の発起人になったり[39]、大阪毎日新聞主催の講演会に加わり金沢市で「婦人運動の根本問題」で講演したり[40]（一九〇七年）、京都市の景気調査会にも参加した[41]（一九〇八年）。キリスト教との

関連では一九〇六年、留岡幸助が主宰する『人道』に犯罪についての学説を紹介する論稿を掲載する。[42] 一九一〇年には、キリスト教青年同盟の夏期学校講習会に講師として参加、「我国の社会問題と基督教」、「活動主義と貯蓄」と題して講演をした。前者では、労働者階級の自覚化が遅れている日本でもサラリアート（「月給取」、「学問ある貧民」）の貧困解決が課題となっており、その解決にキリスト教が積極的な役割があるとした。しかし、このキリスト教は、人間の原罪性や魂の救済のみを強調するのではなく、霊肉ともの救済を導くものでなければならない。[43] こうした米田のキリスト教理解が、聖職としての道を棄てさせることになったとも思われる。後者の貯蓄の必要も、精神的・身体的な生存を危うくさせる貯金ではなく、人間の生活のゆとりをある程度保証すべきだとした。[44]

社会学の紹介・体系化の努力として無視できないのは、一九〇六年四月『現今の社会学』を刊行していることである。[45] これは前年の夏の岡山県教育会での講演をまとめたものであった。岡山県教育会で講演を行うようになった経緯は分からない。ただ、注目すべきは、この頃から京都帝国大学設立準備委員である教育学の谷本富との関係が始まっていることである。[46] 準備委員として英独仏に留学した谷本は〇二年に帰国、とりあえず工科大学講師に就任する。〇六年谷本は開設された文科大学教育学教授法の教授に就任する。[47] その間、谷本は倉敷の大原孫三郎が開催する倉敷日曜講演会の講師にも参加するようになる。大原との関係で後に、谷本に推薦されて米田は大原社会問題研究所の開設にも関与することになる。[48] この岡山・教育という関係から米田は岡山県教育会での講演を依頼されたのであろう。谷本は〇七年開講された社会学講座の担当者に米田を推薦し、実際米田は講師に就任した。最初の専攻学生として高田保馬がいた。[49] 米田は同志社専門学校教授の傍ら京都帝大講師という二つの肩書でしばらくは活動することになった。一九〇八年春頃には、同志社辞任の意を表明する。原田助同志社社長と交渉して、辞任は撤回、ただし、同志社での仕事を軽減したのであろう、月俸が七〇円から三五円に半減している。[50] この辺りから米田の活動の重点がそろそろ京

都帝大に移されて行くようである。

その一歩として一九〇九年に、米田は京都帝大内部に社会学会を設立した。活動内容ははっきりしないが、櫛田民蔵の日記に次のような興味深い記述がある。

「(一九一一年)四月二三日○社会学会に出席、高田学士の現代文明の誤れる進路は、青年の意気寧ろ愛すべし。米田氏のニェチェ(ママ)と社会学会の新傾向は学者の抱負大に徴す可し、而して谷本博士のソリダリチーを論すに至りては陳腐殆んど聞くに堪へず、其の戸田博士に対する駁論の如きは誤解否誤読より出でたるもの、才子宜しく謹慎すべき也。喝」[51]。

京大社会学会の活動についても米田と谷本との協力関係が伺われるが、米田の学問の高遠さに対する肯定的評価と谷本の学問的態度のあやふやさに対する批判が現れている。米田の講演に感心したのか、法科大学に学ぶ櫛田であるが、五月九日には社会学の講義を聴きに行っている。翌年二月六日にも「米田氏の社会学の講演に対す」(三七一頁)とある。高田保馬とは知り合いになったらしく与謝野晶子、鉄幹主催の「新詩社」に参加していた高田に影響されて和歌を作ったりした。一二年の住所録には高田の名前がある(三六三頁)。米田と櫛田とは大原社会問題研究所において再び顔を合わせることになる。米田は一九一三年には東京帝国大学社会学講座教授の建部遯吾とともに日本社会学院を設立して、日本における社会学の学問的自立を図る。一方で、一九一二年、同志社は名称として大学を名乗ることが許され、高等専門機関としての位置づけを一層強化して行く。同志社としては、教育を充実するために京都帝大との協力関係を深めた。当時の新聞記事に次のようにある。

「同志社大学の発足

●同志社大学　来四月より授業を開始すべき京都同志社大学の教授左の如し

原田助、日野真澄、芦田慶治、飯塚恆太郎、和田琳熊、米田庄太郎、中川精吉、中瀬古六郎、浮田和民、佐治秀寿、水崎基一、ギュリギ、ジャイヴリー、グロヴア、ロンバード、ラル子デ、ケリー

此外講師として京都帝国大学より、市村、戸田、神戸、田嶋、中嶋、末広の各法学博士、松本（文）[ママ]、上田、松本（亦）[ママ]深田の各文学博士、河上、河田、竹田、佐佐木の各法科助教授、鈴木、吉沢の両文科助教授等之に当り徳富猪一郎、山路彌吉の両氏は政治経済科の為めに日本国民史を担任すべしといふ[52]」。

学問上の競争においても、米田としてはその実力を研鑽する必要を感じたに違いない。彼はすでに次のように同志社の実力主義についての感想を述べていた。

「某同志社出身者余に語りて云ふ、余が同志社を出でて社会に入るや余り用ゐられざりしも、その後帝国大学を卒業して始めて相当の地位を得るに至れり、同志社の実力主義も実際社会に効能なしと。余謂ふ決して然らず、実力あるものは必ず社会に認識せらる。夫の名目上の位地などは或は実力のみにては得られざらん、而かも実力あるものは必ずや人の信任と尊敬を博して、如何なる位地にありてもその社会の中心たり地盤たるを得ん。同志社の実力主義決して吾人を欺かざるなり[53]」。

それではこの時期の米田の社会学の構想はどういったものであったか。以下に簡単に、『現今の社会学』を紹介しておきたい。大部なものではないが、ここでは内容全体ではなく、モチベーションの紹介に留める。米田にとって社会学はどんな意味があるのか。彼はまず「自分の従来最も力を尽くして研究して居り、尚ほ将来も是が為めに一身を委ねやうとも考へて居る所の社会学」と述べて、社会学が米田の一生に渡る天職であることを強調する。しかし、米田によれば社会学は「まだ至つて幼稚なもので、又其研究も随分困難なもの」であった。「今日の所では学問として成立つて居ると云ふことは言ひ悪い、社会学は学問として成立つべきものでないと論ずる反対の学者もある」。新興科学として方法論の確立してない社会学をどのように自立した学問に育てていくのか、そのために、未熟な自説を展開する前に「社会学の根本問題中で最も重要なるものを択び、それに関する欧米各国の社会学者の意見」について「批評を下」すことと、「社会学を組織」した先駆的な社会学者の「体系学説の大要を説き以て社会学の体系の主要なる模型」を示すことが講演の課題とされた。[54] 以下、先駆的な社会学者としてはコント、スペンサー、グムプロヴィッツ、タールド、ギッディングズを中心にして、それぞれの社会学の特徴が紹介されていくが、社会学の祖としてのコントとスペンサーはともあれ、[55] グンプロヴィッツ以下の三人の選択は、一九世紀末から二〇世紀初頭の社会学の状況が反映されているのかもしれない。グンプロヴィッツは米田によれば「コント及びスペンサーの社会学に対して反動を起し別に新しき体系学説を最初の社会学者の一人」であり、タールドとギッディングズは米田が個人的にも学恩を受けており、当時としてはフランスとアメリカを代表する著名な社会学者でもあった。米田の選択理由はタールドは「殊にスペンサー派の社会学に対して反動を起し、全く異なりたる社会学を発達」させようとしたし、ギッディングズも「従来世に現はれた有ゆる社会学説の枠を綜合して、新い体系を建設」することを試みたという体系希求性にあった。これら五人の社会学者の学説を検討する際、比較の対象として、デュルケムやジンメルも取り上げられている。[56]

この講演の中で、米田が強調しているのは、経済・政治・法・諸文化などの諸分野を含む社会が一つの特徴ある体系として客観的に存在している事実であり、従って、社会を全体として対象化する社会学の存在の優越的なあるいは指導的な役割であった。その点で、ジンメルが、政治／経済／法律などの社会現象の諸利益や内容ではなく、形式を研究することに社会学の独立の根拠を求めていることを好意的に述べている。しかし、形式を内容から完全に分離することについては疑問を呈しているし、特に、恩師ギッディングズやタールドの主張を受けて、心理的内容／関係は社会の形式から取り去ることは出来ないと批判している（四〇―四一頁）。物理的実在・生物的実在以上の人間が構成する社会にあっては心理的作用が不可欠であって、社会を対象とする社会学は、物理学的研究法、生物学的研究法以上に、心理学的方法が有効とされる。「物理界の現象を研究すると同じ方法、同じ精神で社会現象を研究しやうとする」デュルケムは批判の対象でもあった。勿論、デュルケムが「社会学は客観的の学問でなければならぬ」とし、社会は個人の総和ではなく「集合的或は団体的に研究せねばならぬ」と主張することに対しては異議はなかった。しかし、その方法が、「原因を発見することを主眼」としており、「心理的研究法に反対する為め」のものであることを批判する。「社会は本来心理的のものであって心理学的に研究せねば到底社会の真相を観破することが出来」ないし「社会的或は集合的事実と云ふものは個人の外に超然的存在を有する形而上的実体ではな」い（六三―六五頁）。

社会を形成する諸個人の心理的関係の中でも、米田の興味を引いたのはタルドの摸倣説であった。心理的関係には当然「無意識作用や情の作用」も含まれ、ルボン、タールド、デュルケムも主張している。しかし、デュルケムが「習慣は一の社会的事実であって強圧によりて個人を外から強圧する」と主張することには、「何の強圧なしに吾人の心に入る吾人は却て好んで喜んで之を受け入れる」ことがあるのであって、この点ではタールドの摸倣説が「社会的現象の根本的特色を発揮したもの」と米田は考えた。そう考えてタールド説を学ぶためにフランスに渡ったという

（一一一―一二頁）。しかし「社会的現象は悉く摸倣から生ずる」わけでもないし「摸倣は必ずしも社会現象を生ずるとは云へない」。従って、摸倣は「元素的なる社会的現象の特色ではな」い。こうして米田が逢着するのはもう一人の恩師であるギッディングズの「同種の属すると云ふ」意味の「同類識」であった（一一三頁）。

社会とは「二個或は二個以上の有心者の結合より成立せる団体」であって、社会を「一団体」として成り立たせるのは「心理的の力」である。「心理的に類似するよりして其心理的類似を基礎として相互に心理的に結合して一団体」となるのが社会であった（一一六頁）。神経組織の類似さらに進んで心理的類似が積み重なると同類感から同類識に発達する。「同類識を有するに至つた人々は意識的に類似及び共同生活を楽しみ益々之を発達せしめんとつとめ遂に共同の目的に対して有意的に協働するを得る様になる」。この「社会化の過程」の中でそれぞれの個性・観念・感情を持った人格が形成される。「人は社会化を離れて人格化するものではない」のであって「生れながらに有する有機体的生物的特質」があるにしても、「社会化によらずんば此の素質は人格化することが出来ぬ」（一二〇―二一頁）。社会化は人格化＝個性化と表裏の関係で進んで行く。摸倣によって同質化することでタールドがいうように社会の安定が得られるにしても、このことは「異質的に生まれたものが種々の点に於て同質的になつた」ことを意味しない。「同質的になつた其の下に各自固有の異質的素質が潜在して時期を得れば表面に現はれ出でんと企てゝ居る」。「同質的になつたものが其裏面に包蔵する異質的要素の力によつて異質的に分裂し更に又同質的になるのである」（一四一頁）。確かに、安定した同質化が希求されている。しかも同質化される前後の異質的要素への関心は切実であった。勿論、異質は敵対ではない（「差異と反対との混合」を批判。一四八頁）。摸倣による反復やその現象の反対物、それに対する社会的適応、こうしたことを研究するのは学問にとっては必要であった。「反対は臨時的のものであつて永久的のものではない」。それ故反対を重視するのは「人類の将来もヤハリ実に殺伐なるもの」ではある（一五一頁）。反対（敵対）は同質化によって

克服される必要があっても、同質は差異をなくすことではなく、かえって、差異を前提にしている。そうした社会認識が日本においても当てはまるとすれば、いや、宇宙が「無数の異質的単元或は無数の異質的極微」の「同化及び分化の理」（一四一頁）に従っており、学問が普遍性をもつならば日本社会もまた、異質を前提にした同化の反復という米田の認識が当てはまるはずであった。出自や性別、階層、人種といった様々な差異・異質を生かしながら社会が形成される道があるはずであった。[57] 米田はこの道理をアメリカで感得し、それゆえ平信徒として日本に帰国しえたのであった。

五　むすびにかえて——同志社辞任

米田庄太郎は一九一四年七月同志社を辞職する。当時の『同志社時報』は簡単に「大学政治経済部米田庄太郎氏には今回一身上の都合に依り辞職せられたり氏は明治三十五年一月就任、十有余年の間専門学校大学部教授として鋭意本校の為めに尽力せられ又数年図書館委員として図書館事務を処理せられたり」と事実だけを報告している。[58] 毎年の社長并校長報告でも、七月に米田が辞職したことと長年に渡って「教授として本社の為め尽瘁せられたるの功は吾人の永く忘るべからざる所なり」と簡潔である。[59]「一身上の都合」とは社会学の体系化のための拠点を京都帝大に据えようということであろうか。確かに、同志社辞任と同時に、これまでの室町一条の同志社社宅を離れて、岡崎入江町に転居し、所属の教会も京大・三高関係者の多い聖マリア教会に転会している。[60] しかし、庇護者であった谷本富は一九一三年、所謂沢柳事件で京都大学を辞任させられている。[61] 米田の京都帝大での身分は文科・法科大学の嘱託講師であり、社会学講座の専任講師となるのは一九一九年五月と、同志社辞任から少し時間があった。博士号を取得し、

ノ京都帝国大学教授に就任するのはその翌年であった。その点で、「一身上の都合」の具体的理由は今一つ明らかではない。当時、アメリカに留学中で、一五年帰国して神学部助教授となる大塚節治は、帰国後、米田が担当した社会学を担当させられ苦労した経験を回想して、「元来、同志社には、我が国社会学の草分けをなした、米田庄太郎教授があり、氏は、フランスの著名なる社会学者、タルドの弟子であって、当然に、先生が担当すべきであったが、氏はその時は同志社を去って、京大の教授となり、なにか、同志社としては氏に講義を依頼し難い事情があったらしく思われた」と述べている[62]。「氏に講義を依頼し難い事情」とは何なのか、大塚の回想は触れていない。

ところで、一九一四年頃の同志社について、同志社普通学校の教頭をつとめ日野・水崎基一とともに「原田体制の三本柱」（本井康博）ともいわれる波多野培根が次のような発言をしている。一九一九年、同志社社長（一七年より総長に改称）の原田助辞任に至る紛糾が発生し、その間、原田との軋轢を深めた日野真澄の居宅が炎上、そのために日野の子女の焼死事件が発生する[63]。「…事件の発端に関連した問題は大正三年経済科学生の大学改革運動で、その後半は原田社長排斥の声となつたが、当時大学の中心人物は米田庄太郎氏であつたが此騒動の為に引責された。滝本法経部主任はその後に就任したものである」[64]という。この証言からすると、米田は高等教育機関をめざす「大学の中心人物」であり、一九一四年の同志社騒動とも関連して、同志社を「引責」辞任した。その当時の新聞報道では「原田助氏神戸教会より入りて社長に就くに及び年来同志社に接近せざりし校友も翕然として来りて母校の為に尽力することゝなり社運日々隆盛となりたれば茲にいよ〳〵大学制度を採用すると共に従来の教師の外京都大学より多数の教授を傭し政治、経済、文学科に夫々教鞭を就らしめつゝありたるに端なくも大学部経済科学生は同学長たる水崎基一氏に対し不平を懐く者を生じこれと同時に小西増太郎氏にも慊らざる者ありて学生は水崎氏を学長の職より退かしめ単に教師たらしむる事及び小西氏を排斥せんとの同盟を作り東上委員を選びて校友浮田法学、三宅理学の両博士等に陳情せし

む る」に至った。[65]

波多野の発言を傍証する他の新聞報道がある。「経済科一年五十余名は先般来経済科専任学長の招聘、図書館の改善、教授の増聘を希望」との具体的な要求を挙げる。[66] こうした中で「教授会委員中川、飯塚両教授より学生に対し調停を試み又米田教授も個人として諸君の希望は学校にても之を諒とすれば其提出案は無条件にて撤回すべしと勧告し学生側は米田氏の言に服従する意向を示したれども教授側にては学生の態度不穏当なりとして謝罪を求めたり是において学生側は十八日の深更まで協議の末謝罪する理由なしとのことに決し一方学校側は十九日に至り校門を閉鎖し門前に『本学期の授業は今日以後休業す試験は九月に行ふことゝせり』との意味を掲示し経済科は勿論各科共全部休学の姿となり事態容易ならざる形勢なり」。[67] 結局、同志社政治経済学部としては六月二五日に声明を出し経済科一年生に対する処分を決定した。[68] 学生処分と拘わって、米田は同志社辞任を決意したと思われる。大塚節治が感じた米田に「講義を依頼し難い事情」はこのことであろう。こうして米田は同志社を去った。[69]

社会学の体系化という米田の希望からすれば、一つの重要な転期であった。この後、京大を去った谷本に推薦されて岡山・倉敷の資本家大原孫三郎が大阪に設立した大原社会問題研究所の運営にも関与することになった。しかし、同じ哲学科の西田幾多郎の支持を受けつつ、専門分野を確固とし京大の中で米田が安定した発言力を得るためには、さらなる困難が待ち受けているようにみえた。[70]

註

（1）米田の大正デモクラシーの中での位置づけについては、鈴木正節『大正デモクラシーの群像』（雄山閣、一九八三年）。太田雅夫編『資料・大正デモクラシー論争史（上巻）』（新泉社、一九七一年）は米田庄太郎の「デモクラシーと我国」（『大阪朝

日新聞』一九一九年）を収載している。

（2）高田保馬『日本に於ける社会学の発達』（『岩波講座教育科学第18冊』岩波書店、一九三三年）は、日本の社会学史の中で、第一期―草創の時期、第二期―社会有機体説の時期、第三期―心理学的社会学の時期、第四期―形式社会学の時期、第五期―文化社会学の時期と区分したうえで、第三期が米田の京都帝国大学での社会学講座開設に始まるとしている（八頁）。その他、米田の社会学については、高田保馬「米田博士の追憶」（『社会学研究』一二巻一号、一九四八年）、同「米田庄太郎先生のこと」（『書斎の窓』一九号、一九五五年）。大道安次郎『日本社会学の形成』（ミネルヴァ書房、一九六八年）など。

（3）戦後、桑原武夫は京大教授であった父（桑原隲蔵）からの聞き書きを根拠として、京大文学部教授会での米田の教授就任の遅れが出自に関連する差別問題であったことを論じた。桑原武夫「人間の戦い」（『部落問題』一四号、一九五〇年）。それを受けて、木村京太郎が「米田庄太郎博士を偲ぶ」（『部落』四三号、一九五三年）で、米田の生涯をやや詳しく論じている。また、一九六〇年代後半、全共闘運動に近い立場に立った高橋和巳（作家、京大助教授）も桑原の論文に依拠して、米田についてふれていた。高橋和巳『わが解体』（河出書房新社、一九七一年）七―一二頁。桑原は米田の「さびしい、あきらめの顔」を思い出し、木村は「河上肇先生のような実践力のなかったことを惜し」んでいる。社会学の分野では、中久郎『米田庄太郎』（東信堂、二〇〇二年）など、参照。

（4）奈良県立同和問題関係資料センター編『米田庄太郎―人と思想』（一九九八年）はその際の冊子である。なお本稿作成について、同センター所蔵の資料の利用の便宜を図っていただいた。記して、感謝の念を表します。

（5）米田庄太郎「ドーマン先生」（松島篤編『アイザック・ドーマン師追憶録』教会時報社、一九三三年）二〇頁。

（6）『同志社百年史・通史編』（同志社、一九七九年）には米田の名前は数箇所現れるのみであるし、最近の同志社山脈編集委員会編『同志社山脈』（晃洋書房、二〇〇三年）にも米田の名はない。社会学の分野でも、高田は前述のように、京都大学での米田の活動をその社会学の出発点であるとして、「同志社に於ける講義は更に溯るべきことではあるが、それらの日本社会学に及ぼしてゐる影響は取上げてこれといふべきものではない」と述べている。高田、前掲「米田博士の追憶」一〇九頁。

（7）「同志社理事会決議録（自明治三二年七月至三七年二月）」（『同志社談叢』第二号、一九八三年）一六六、一七三頁。明治三四年度の社長の報告・校長の報告も参照。『同志社百年史・資料編1』（同志社、一九七九年）八二九頁。

（8）『留岡幸助日記』第二巻（矯正協会、一九七九年）一五―一八頁。奈良訪問の経緯については、相田良雄「並木の下に出入して」（牧野虎次編『留岡幸助君古希記念論集』留岡幸助君古希記念事務所、一九三三年）八〇五頁。相田は十八間戸は「光明皇后の遺跡」ではなく、「後人の営利的施設」としている。北山十八間戸については、吉田栄治郎「救癩施設・北山

十八間戸移転論の隘路をめぐって」（『研究紀要（奈良県立同和問題関係資料センター）』九号、二〇〇三年）。留岡の部落問題認識の変遷については、拙稿「キリスト者と水平社―留岡幸助の部落問題論」（秋定・朝治編『近代日本と水平社』解放出版社、二〇〇二年）を参照されたい。

(9) 『同志社校友会々報』（一〇号、一九〇二年八月）八―九頁。以下、資料引用については、……は省略、／は改行、（ ）内は筆者の追加を示す。本文中に頁数を記す場合もある。傍点、傍線は省略した。

(10) 米田の経歴・著作については、奈良県立同和問題関係資料センター編、前掲『米田庄太郎』、横井敏郎「戦前日本の社会学者米田庄太郎著作目録・略年譜・参考資料・書誌」（『立命館大学人文科学研究所紀要』七七号、二〇〇一年）に詳しい。

(11) ドゥーマンの略歴については、松島篤編、前掲『ドーマン師追憶録』一―二頁。

(12) 米田、前掲「ドーマン先生」一二―一三頁、一八頁、二〇頁。

(13) 飯沼和正・管野富夫『高峰譲吉の生涯』（朝日新聞社、二〇〇〇年）にはアルバイトで働くコロンビア大学の「文科系の留学生」として「米田さん」が登場する。一八八頁。しかし、その記述では、特許関係の事務を扱ったとしている。人類学のフランツ・ボアズについては太田好信『人類学と脱植民地化』（岩波書店、二〇〇三年）参照。

(14) 『基督教週報』（五号、一九〇〇年三月三〇日）。

(15) 奈良県立同和問題関係資料センター編、前掲『米田庄太郎』六―八頁。訳文は少し変更を加えた。

(16) 米田、前掲「ドーマン先生」一八頁。

(17) ドゥーマンの実家がクリスチャンであったことは、ドウマン（米田庄太郎訳）『比較宗教学』第四巻（日本聖公会書類会社、一八九五年）一五頁に「余は基督教徒の家に生れ、基督教徒として教育された」と述べていることによる。彼は続けて、「二十五歳の春を迎ふるまでは回々教国に住居し、又夫より汎く回々教諸国及び基督教諸国を旅行せり。而して今や七年の星霜を仏教の感化の下にありては最も進歩的なる国民の内に送れり」。

(18) 一九世紀アメリカ合衆国の社会状況については、有賀夏紀『アメリカの20世紀（上・下）』（中央公論新社、二〇〇二年）、多民族的移民国家の形成については古谷旬『アメリカニズム』（東京大学出版会、二〇〇二年）。

(19) ラフカディオ・ハーンについては、研究書は多いが、とりあえず、平川祐弘『ラフカディオ・ハーン』（ミネルヴァ書房、二〇〇四年）。ドゥーマンの日本での経験を述べた前引の著作にもハーンへの言及が見られる。

(20) 奈良県立同和問題関係資料センター編『奈良の被差別民衆史』（奈良県教育委員会、二〇〇一年）二〇五―〇六頁。論文のタイトルは「雑誌発兌ニ依リ邦国ニ及ボス進歩ノ勢力ヲ論ス」と「衛生上ニ付聊老婆心ヲ敬愛スル日本親友ニ呈ス」であっ

た。ドゥーマンによれば、「基督教ハ実ニ新日本ノ始メヨリ此処ニ来」て学校の建設、会堂の設立、「孤児院或ハ慈善病院其他学術ノ進歩ノ為メ慈善的事業進歩ノ為メ種々善良ナル働キヲナセリ」という。ドウマン（米田庄太郎訳）『比較宗教学』第一巻（日本聖公会書類会社、一八九二年）一〇頁。

(21) Jacob Riis:*How the Other Half Live*, 1890(Dover Edition,1970). リースは一八四九年デンマークに生まれ、二一歳で合衆国に仕事を見つけに移住、七七年以降、ニューヨークの新聞・通信社の探訪員 a police reporter として活動を始め、その記事を基にして本書が成立した（ドーバー版の序文による）。

(22) 社会福音派についてはホプキンズ（宇賀博訳）『社会福音運動の研究』（恒星社厚生閣、一九七九年）参照。

(23) 米田庄太郎先生講演『現今の社会学』第一号（岡山県教育会、一九〇六年）四三頁によれば、アメリカ留学中、「社会学を社会哲学と解し」て「社会学と社会科学と関係を明亮に且つ正当に理解した」ヴァンニーの著作『社会学の批判的考察』を「米国の友人」と翻訳しようとしたという。

(24) アメリカの大学の形成については、潮木守一『アメリカの大学』（講談社、一九九三年）、社会科学の形成については中谷義和『草創期のアメリカ政治学』（ミネルヴァ書房、二〇〇一年）、苅田真司「アメリカ社会科学形成史に関する一試論」（『社会科学研究』四八巻三号、一九九六年）。

(25) Burgess,J.W.: *Reminiscences of American Scholar*, Columbia University Press,1934(reprinted 1966),pp52-54. 同書によれば、改革期のコロンビア大学で「第二世代」に属すクラークやギッディングズなどは「最高の能力と教養のある人物」であり「一八九〇年からの一〇年間は、政治科学学部と大学院の繁栄の時代」であった。*op.cit.*,p244.

(26) 中谷、前掲書、六八頁、第三章「J・W・バージェス」「I 略伝」の注8。

(27)『奈良基督教会八十年史』（奈良基督教会、一九六六年）。

(28) 日野真澄の略歴については「故日野真澄先生略歴」（大塚節治執筆『基督教研究』一二巻四号、一九四八年）。留岡幸助の生涯については、室田保夫『留岡幸助の研究』（不二出版、一九九八年）。

(29)『留岡幸助日記』第一巻（矯正協会、一九七九年）三八三―六二一頁。

(30) 大塚素の生涯については、室田保夫『キリスト教社会福祉思想史の研究』（不二出版、一九九六年）を参照。

(31) 中瀬古六郎「諸名家に見たる大塚素君」（『人道』一九二〇年九月）一〇頁。

(32) 加藤延年「諸名家に見たる大塚素君」（『人道』同右）一一頁。

(33)「日誌」大塚素遺稿編集委員会編『大塚素遺稿』（一九二三年）八〇八―一一頁。

(34) 米田の担当や使用教科書については『同志社校友会々報』各号、『同志社百年史・資料編』専門学校の部分。
(35) 前掲『同志社校友会々報』一〇号、一一―一二頁。
(36) 『労働世界』七巻三号（一九〇三年一月）一四頁。同号に、米田庄太郎「仏国の社会党」を「京都同志社教授」の肩書で掲載している。一〇頁。
(37) 『平民新聞』一九〇四年一〇月一六日。
(38) 聖三一教会には同志社教会から転会した松山高吉がいた。溝口靖夫『松山高吉』（松山高吉刊行会、一九六九年）参照。また聖公会系教会での米田の活動については機関誌『教会時報』、京都聖マリア教会歴史編集委員会編『京都聖マリア教会史（前編）』（京都聖マリア教会、一九九〇年）参照。組合系の四条教会では一九〇二年二月二三日青年会演説会で米田が講師の一人を務めている。『京都教会百年史』（日本基督教団京都教会、一九八五年）二二四頁。
(39) 『同志社時報』三八号（一九〇七年一一月）。谷本富、原田助も発起人となっている。この組織の具体的な活動は不明。
(40) 講演録「婦人運動の根本問題」を『続現代社会問題の社会学的考察』（弘文堂書房、一九二一年）に収載する際の注記による。
(41) 『同志社時報』四五号（一九〇八年六月）。
(42) 米田庄太郎「犯罪学研究資料（一）―（五）」（『人道』一九〇六年一月―七月）。
(43) 米田庄太郎「我国の社会問題と基督教」（『開拓者』一九一〇年九月）。本誌の閲覧については大谷大学図書館の便宜を得た。記して感謝の意を表します。
(44) 米田庄太郎「活動主義と貯蓄」（『開拓者』一九一〇年一一月）。
(45) 本書については、奈良県立同和問題関係資料センターがコピーされた京都大学文学部社会学講座所蔵の複製を利用させていただいた。なお、原本表紙には谷本富に献呈するとの著者の書き込みがある。
(46) 前註（45）の書物を谷本に献呈したのがいつのことか分からないが、後述の京大学内での社会学会を谷本と米田の協力で行なっていることなど、関係の深さを示している。沢柳事件で谷本が京大を辞職するに至った際にも、米田と高田保馬などが中心となり八坂社南の中村楼で慰問の会を開いた。高田保馬「谷本博士追悼三首」（谷本先生遺稿出版委員会編・発行『中等教育の革新』一九六二年）一五二―五三頁。その一首は「先生（谷本）なく米田先生またおはさず／今年も近しこがらしの音」とある。
(47) 谷本の経歴・主な業績は前掲『中等教育の革新』に収載。一七二―八一頁。また、稲葉宏雄『近代日本の教育学―谷本富と

小西実直の教育思想』（世界思想社、二〇〇四年）参照。京都帝国大学文科大学や社会学講座の設立経緯については『（京都帝国大学）文学部三十周年史』（一九三六年）、『京都帝国大学史』（京都帝国大学、一九四三年）。

(48) 谷本が大原の後援する倉敷日曜講演会に最初に行くのは一九〇五年一二月であり、それ以後一九一二年までに五回、講演を行っている。大津寄勝典『大原孫三郎の経営展開と社会貢献』（日本図書センター、二〇〇四年）二五九―六一頁の一覧表「倉敷日曜講演会論壇と講師」による。大原社会問題研究所との係わりについては法政大学大原社会問題研究所編・発行『大原社会問題研究所三十年史』（一九五四年）を参照。詳細については後稿の課題としたい。

(49) 高田は「社会学科ただ一人の専攻学生として其教を受け」たという。高田保馬、前掲「米田博士の追憶」一一四頁。

(50) 「同志社常務委員会記録」によれば、一九〇八年二月二八日の委員会で「米田庄太郎氏辞職ノ件ハ、社長（原田助）ニ其交渉ヲ一任スル事ニ決ス」とあり、四月三〇日には社長報告として「米田庄太郎氏俸給ハ其休ミ中二ケ月間、従前ノ通り月俸七拾円ヲ支給スル事（但シ、九月以後ハ月俸ヲ三拾五円ノ事）同氏辞職願撤回ヲ乞ヲ容レ、従前ノ通リ、専門学校教授トナス事」と決定した。「同志社常務委員会記録―自・明治三十七年四月二十七日／至・明治四十四年七月十日」（『同志社談叢』第五号、一九八五年）二一九頁、二二一頁。

(51) 『櫛田民蔵・日記と書簡』（社会主義協会出版局、一九八四年）三一三頁。

(52) 『大阪毎日新聞』一九一二年二月二八日。

(53) 『同志社時報』四四号（一九〇八年五月）。

(54) 前掲『現今の社会学』一―二頁。以下、頁数は本文中に記す。

(55) 社会学の簡単な歴史については富永健一『社会学講義』（中央公論社、一九九五年）を参照。

(56) デュルケム、ジンメルの著作を取り上げているのは、米田の独自な考えというより、恩師であるギッディングズなどの考えに基づく可能性も有る。例えば、Giddings: *Principles of Sociology*, 1896 の四三二頁以下にはデュルケムの『社会的分業論』『社会学的方法の基準』やジンメルの『分化（差異化）論』などの著作が参考文献に挙げられている。

(57) 同志社時代の米田の言論活動でも、労働者階級、知識階層（月給取）の運動、女性の解放運動に限られず、工業に圧迫された農業・農民、貧困、犯罪、売春といったマイノリティや「異常」現象への関心が見られるのも、社会についての理解に基づいていると思われる。労働・知識階級・婦人運動・犯罪については本文でも触れた。農業・農民については一九一一年の「現代の文明と農業」（『産業組合』六三、六四号）、貧困については一九一二年の「貧民の研究」（『慈善』三巻三号）などがある。黒川みどり『同化と異化の間』（青木書店、一九九九年）も参照。

(58)『同志社時報』一一三号（一九一四年一〇月）。
(59)「同志社社長兼校長報告（大正三年度）」前掲『同志社百年史・資料編1』八九一頁。
(60) 前掲『京都聖マリア教会史（前編）』参照。
(61) 沢柳事件については、稲葉、前掲『近代日本の教育学』「第三章・谷本富と沢柳政太郎」に詳しい。なお、沢柳事件で京大を退職させられた七教授中、谷本、天谷千松、村岡範為馳、三輪恒一郎が倉敷日曜講演会の講師を務めた。大津寄、前掲書による。
(62) 大塚節治『回顧七十七年』（同朋舎、一九七七年）九九―一〇〇頁。
(63) 一九一九年一月二四日、日野は「不慮の災禍によつて一夜にして五女を失ふ」。前掲「故日野真澄先生略歴」二八〇頁（日付は二五日）。西田幾多郎の日記一月二四日条「日野君を見舞ふ、昨夜失火、五子焼死せる由」とある。『西田幾多郎全集』一七巻（岩波書店、一九六六年）。また日野真澄『悲劇の苦杯』（丙午出版社、一九二一年）も参照。
(64) 波多野（培根）氏談「同志社紛擾の真相」（日野、同右『悲劇の苦杯』）二九一頁。
(65)『大阪朝日新聞』一九一四年六月六日。
(66)『大阪毎日新聞』一九一四年六月一一日。
(67)『大阪毎日新聞』一九一四年六月二〇日。
(68)『同志社時報』一一五号（一九一四年一二月）。
(69) 米田と同志社の関係は完全に切れてしまったわけではなく、一時期（一九一八年）弟子にあたる高田保馬が同志社の嘱託講師として社会学を教えている。
(70) 西田幾多郎との交友関係については、高田、前掲「米田庄太郎先生のこと」にも触れられている。西田幾多郎の前掲「日記」にも交際の親密さがうかがわれる。

付記　本稿は、同志社大学人文科学研究所の「同志社社史資料の研究」班二〇〇三年一〇月一〇日の研究会、世界人権問題研究センター第三部近代班二〇〇四年一月二四日の研究会、九月一一日の日本政治思想史研究会での発表を基礎として作成した。各研究会の参加者に謝意を表すとともに、ご批判ご教示を充分活かし切れていないことをお詫びします。